

私の住む街には、鳥海山を臨む高原に小さな天文台があります。

『由利本荘市スターハウスコスモワールド』

南由利原高原の中にある青少年旅行村の広大な百合畑の中にひっそりと建つその天文台は、どこよりも心穏やかになれる、私の大好きな場所の一つです。

小さなロビーと、定員四十名の今では珍しくなってしまった手動式のプラネタリウムのあるプラネタリウム室。二十名が入れば、もう一杯になってしまう天体観察ドームには、私達が親しみを込めて『ジンデン鏡』と呼ぶ、口径六十センチメートルの反射望遠鏡が鎮座しています。そしてその天文台を一步外に出ると、そこには満天の星達。天の川が美しく輝いています。

市街地から、車でわずか二、三十分で辿り着けるこの別世界に足を踏み入れるようになってから、長い時間が過ぎてゆきました。ここには私の、そして星の会の仲間達とのたくさんの思い出がちりばめられています。数々の天文ショーと共に。そんな私の星との出会いは、今からもう二十年も前のことでした。

「文系ですか、理系ですか？」

もしそう尋ねられたとしたら、もちろん『文系です』と答えます。

「インドア派ですか、アウトドア派ですが？」

そう尋ねられたら間違いなく『インドア派です』と答える、それが以前の私でした。

本が好きで、とにかく本を読んでいれば幸せ。そんな私が劇的に変化したのは、七十六年ぶりに姿を現わしたあの『ハレー彗星』がきっかけです。

連日のマスコミのフィーバーぶりに、最初に飛び付いたのは、中学校以来の友人達。好奇心旺盛な彼女達に連れ出され、真夜中の『理科センター』に辿り着いたのは、午前2時を回っていました。真夜中だというのに、そこにはたくさんの人が集まっていて、注目度の高さを物語っていました。お目当ての『ハレー彗星』をドキドキしながら待っている間も、幾度となく歓声が聞こえてきます。やっと順番となり観測室へ上がって望遠鏡を覗くと、そこには白く霞む『ハレー彗星』が見えました。私も友人達も、思わず声をあげました。今話題の『ハレー彗星』を実際に自分の目で確かめることが出来ることには、やはり大きな感動がありました。ましてこの次見ることが出来るのは七十六年後と言われれば尚更です。彗星が何であるかさえよくわからなくても、『ハレー彗星』には強いインパクトがありました。何か得たような、そんな気持ちにさせてくれる何か。

それから、いくつかの星雲、星団を見せてもらって、私達の世紀の天文ショーは、楽しく幕を降ろしました。

普通だったら、これで終わりだったのかもしれませんが。私達の誰一人として理系ではなく、天文に興味のある者など、一人もいなかったのですから。

ところが、その時星の説明に来ていた星の会の会長さんというのが実にユニークな人物だったため、予想外の展開になってしまいました。星座や星の話がわかりやすいだけではなく、とても

おもしろい。そして星雲や星団を「あっ」という間に入れてしまう早業は、まるで魔法のようでした。友人達は『あれよ、あれよ』という間にその魔力に引き込まれ、いつしか私達は、会員になってしまったのです。

それからというもの、予定が合えばみんなで集まり、観望会に出かけるようになりました。

「すごい、『月』ってこんなに明るいよ。」

「これ、ドーナツに見える。」

全員初心者。星のことはよくわからなくても、そこにいけば新たな発見と驚きがあり、楽しい時を過ごすことが出来ました。回を重ねていけば、少しずつ星もわかってきます。見上げた空にわかる星が増えてくると、星空がまるで友達になってゆくように思えてくるのが不思議でなりませんでした。

しかしそれは年頃の女の子の常で、彼氏が出来れば自然に足は遠退いてゆき、友人達は次々と会を辞めてゆきました。ところが一人取り残された私は、そんなに乗り気ではなかったはずなのに、会を辞めるどころか、何故か頻繁に足を運ぶようになっていました。

きっと、木星がいけなかったのでしょう。木星の縞、縞模様。教科書のイラストでしか見たことがなかった木星のその表面の雲が描き出す模様に、何故か私は魅せられてしまったのです。大きな機械か何かがあれば見る事が出来ないと思っていた星の色や形や模様が、実は身近な双眼鏡や望遠鏡でも簡単に楽しむことが出来る。それがわかった時、星は一層身近なものへとかわってゆきました。

また、星の会に入会したことで、いろいろな人々と出会えたことも大きな要因でした。会長を初め、みんなが個性的で素敵な人達でした。それぞれが自分の好きなように星と関わっています。月だけを見ている人、球状星団が好きな人、写真を撮る人、日食が好きな人。みんな自由に楽しんでいました。

「来る者拒まず、去る者追わず。『星がきれいだあ!』と思える人は、誰でも会員になれる。」そんな会長の『モットー』の元、ただ『星がきれいだあ!』と思えるだけで会員になった私にとっても、この会はとても居心地の良い場所だったのかもしれませんが。いつしか私も本当の星好きに変わってゆきました。

その頃、街に新しい天文台が出来ました。それが『コスモワールド』です。身近な場所に出来たこの天文台こそが、私の星好きに拍車をかけてゆきました。

天体観測の欠点は、暗い所でなければ星がきれいに見えないことです。より良い場所を求めて車を走らせましたが、道路がひどかったり、熊の出没が危ぶまれたり、トイレがなかったり汚かったりと、女性によってはなかなか厳しいものがありました。

ところが、新しく出来たこの天文台は、すべての難点をクリアにしてしまったのです。おまけに六十センチの反射望遠鏡付きで、私にとって、致せり尽くせりの場所でした。

天体観察ドームで望遠鏡を覗いてみると、驚く程の感動が待っています。はっきり浮かびあがる月のクレーター。眩しい程の輝きの金星やベガ。美しいグリーンの天王星。澄んだブルーの海王星。ヘルクレス座の球状星団 M13 の圧倒的な美しさ。そして何よりも大好きな木星の縞。『ジ

ンデン鏡』の中の宇宙は、言葉では言い表せない美しさがあり、大きな、本当に大きな感動を与えてくれました。火星の大接近の時は見事な極冠を、太陽の活動が活発になれば迫力の太陽を、その時々天体現象に合わせて様々な宇宙を『ジンデン鏡』は見せてくれたのです。

そして、むせるように百合が香る外に出てその空を見上げれば、満天の星が向かえてくれます。夏の大三角形が輝き、天の川がきれいに見えます。鳥海山の上には、さそりの心臓のアンタレスが赤く輝いています。流れ星に声をあげ、人工衛星に釘付けになる、私の好きな夏の夜空がそこにありました。

みんなはそれぞれ双眼鏡や望遠鏡を出して、それぞれの器材に合った星を入れています。星にはその星に合った器材があることを、星の会に入るまでは私は知りませんでした。双眼鏡には双眼鏡の、小望遠鏡には小望遠鏡の良さがあります。中古で買った私の六センチの屈折望遠鏡でさえ、りっぱに活躍していました。

地元の星の会として『コスモワールド』をお手伝いするようになって、随分長い月日が過ぎてゆきました。そこにはいつも子供達の笑顔がありました。

私の住む秋田では、年間の快晴日数は約二十日、晴れの日さえ約八十日しかありません。北日本の日本海側に位置する秋田では、昔から概して天候に恵まれず、一年の内晴れの日が三分の一もないのです。また、酒類の消費量も多く、星を見る機会は本当に少なかったようです。

そんな秋田では、子供達が星に触れる機会は極限られてきます。両親が星好きでなければ、キャンプの時や宿泊研修、町内会や子供会、そして学校の行事の時だけ。しかもその日が必ず晴れるとは限りません。

だからこそ、晴れた日に『コスモワールド』を訪れる子供達には、満天の星空を思う存分楽しんでもらいたいと思わずにはいられないのです。純真なその瞳で見上げる空には、たくさんの驚きと発見が溢れているのですから。

世界天文年の今年、一人でも多くの子供達に星空を楽しんでもらおうと、私は希望に燃えていました。けれども思わぬ病に倒れ、そのほとんどを療養に費やすこととなってしまいました。この一年、星と離れて思うことは、星はやはり美しく、果てしない宝物であること、そして嫌なことをすべて洗い流してしまう私の万能薬だということです。病院から家に戻り、部屋の天井に投影した満天の星空を見た瞬間、思わず大粒の涙がこぼれ落ちました。

そして来年こそは元気になって、またあの場に戻りたいと思います。百合の香る満天の星の下。私の大好きなあの風景の許へ。